

# 本物の音楽を聴く

——芸術学における学生との協働的な授業展開——

石 山 英 明

## Listening to Genuine Music

—The Cooperative Class Development of the Art (Geijutsugaku) with Our Students—

Hideaki ISHIYAMA

### はじめに

本稿では芸術学において、学生の「本物の芸術」への学び・理解につながる授業展開にあたり、筆者がどのように取り組んできたかについて述べる。

「芸術とは、たのしい記号と言ってよいだろう。それに接することがそのままたのしい経験となるような記号が芸術なのである」と鶴見（1999）は言う<sup>(1)</sup>。しかし、我が国において日常的に芸術に触れている学生は、芸術を専攻する学生を除くとまだまだ少数なのではないだろうか。本来「たのしい」はずの芸術に、「敷居が高い」「自分とは無縁の世界である」「コンサートに行きたいけれど高いチケット代を払うことが出来ない」などの理由で、学生たちから避けられる対象になってしまっているとしたら大変残念な事である。

本稿では、筆者が芸術学を履修する学生とともに考えてきた「本物の芸術」あるいは「本物の音楽」の持つ「力」や「素晴らしさ」「凄さ」について述べる。また、それらを学生に伝達するために筆者が授業で行ってきたこと。またそれらが、学生にどのように受け止められているかを、授業の感想文および学生による授業アンケート結果から分析する。今後の授業展開において、学生が「本物の音楽を聴く」とはどのようなことかを考察してみたい。

### I 本学における「芸術学」

芸術教育はしばしば感性の育成として論じられる。佐々木(2016)は感性の育成について、「家庭や学校で、人といっしょに楽しむこと、人が悲しんでいるときにいっしょに悲しむこと、人と共感する心を育てること」と述べている。佐々木の言葉から芸術を理解すれば、「人の心に共感すること」と言い換えることが出来るだろう<sup>(2)</sup>。芸術における「共感」とは、先達が残し、時代を生き抜いた様々な芸術作品や、同時代に芸術と共に生きる芸術家の生きざまを知り、それらの心の底にある「人間の本質」について想いを巡らすことである。芸術に共感できること

が、感性豊かな人生を送るうえでは大変重要である。

では、現在の初等中等教育における芸術教育は何を子どもたちに学習させることを目的にしているのか。本学では保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の養成を行っている。保育者・教育者を志す学生がまず芸術教育を受けるにあたり、何が音楽科（芸術科）の学習目的であるのかを理解しておかねばならない。

そこで、まず次項では初等中等教育における音楽の今日的課題を確認しておきたい。

## 1. 初等中等教育における音楽の現代的課題としてのアクティブ・ラーニング

2014（平成26）年11月20日、下村博文文部科学大臣（当時）は、中央審議会に初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について諮問した。審議を求めた文書には、繰り返し「アクティブ・ラーニング」なる用語が取り上げられ、にわかに教育界の関心を集めることになったのは周知のことである<sup>(3)</sup>。なお、2016（平成28）年度中に、学習指導要領は改訂される見込みである<sup>(4)</sup>。

音楽科、芸術科（音楽）におけるアクティブ・ラーニングにおいて大切だとされることは、「子供一人一人が感性を働かせながら、思考・判断し、表現する一連の過程を大切に学習指導を実践することである」と臼井（2016）は示している。「学習指導要領では、小・中・高等学校を通じて、『音楽を形づくっている要素を知覚（小学校においては「聴き取り」。以下同じ。）し、それらの働きを感受する（小学校においては「感じ取る」。以下同じ。）こと』が表現及び鑑賞の学習の支えとなるものとして位置づけられている。」

この「知覚」と「感受」は、『高等学校学習指導要領解説 芸術（音楽）編』では次のように説明されている。

「知覚」とは、聴覚を中心とした感覚器官を通して音や音楽を判別し、意識することであり、「感受」とは、音や音楽の特質や雰囲気などを感じ、受け入れることである<sup>(3)</sup>。

臼井によれば、「音楽を形作っている要素とその働きの視点で音や音楽を捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関わらせることが重要」である。そして、「音楽の学習を繰り返す中で豊かなものとし、生涯にわたって音楽を愛好し、音楽に主体的に関わっていくことに有効に働くものとして」いくことが必須であるとされる<sup>(5)</sup>。

音楽科における子ども達の主体的な学習姿勢の習得において、臼井は鑑賞学習を例に挙げている。特に、子ども達の「思考・判断を深めるためには、音楽活動と言語活動の往還を図ることが大切である」という。音楽を聴き、「何となく……」感じられることを「自分の言葉で表すこと」によって、子ども達は「このようなことに気づいた」、「このように感じた」と「自覚」していくことになる。

この過程において「必要」とされるのは、「他者との対話」である。他者と音楽を聴くという活動を共有することで、「互いに気付いたことや感じたことについて交流し、音楽的な特徴

について共有し合ったりする活動は、主体的に音楽に係ること」「他者とともに音楽を聴くことのよさを実感することにつながる」という。そして、「『いろいろなことが感じられるこの音楽の面白さは何か?』を、客観的な根拠をもとに他者と交流し、自分なりの考えを持ったり、音楽に対する価値意識を構築したりしていく過程に音や音楽の学習としての意味がある」という<sup>(5)</sup>。

ここで注意しなければならないのは、「分析的に音楽を捉えることのみに終始してしまう授業」は避けなければならないということである。アクティブ・ラーニングの視点に立って、音楽や芸術科の学習を充実させていくためには、「『音や音楽によって子供の心が動く瞬間』を学習過程にどのように仕込むのかを大切に」することが重要になるのである<sup>(6)</sup>。

## 2. 芸術学の概要と開講目的

1. では初等中等教育における音楽の現代的課題としてのアクティブ・ラーニングの議論について確認した。次に本学における芸術学の概要と開講目的を示しておきたい。

芸術学は、2015年度より桜花学園大学保育学部の2年後期に選択授業として配置された。担当教員は、基村昌代准教授（専門領域：音楽《声楽》）、田端智美准教授（専門領域：美術《版画》）、石山英明（筆者、専門領域：音楽《ピアノ》）の3名である。この3名の教員で、合計15コマを等分して授業を担当している。

芸術学の「授業概要と方法」は桜花学園大学の『学習の手引き』（シラバス）に次のように記載している。シラバスの内容は3人の授業担当者の合議で決定している。授業では「音楽・美術等、芸術に関して多角的に幅広く講義し『芸術とはなにか』を追求」すること。また、「芸術の細かな知識を身につけるのではなく、世界共通の文化として概略的に理解・経験すること」を目的としている。到達目標は「①芸術とは何かを理解できるようにする。②芸術を鑑賞する力や方法を身につける。③芸術を実際に体感・鑑賞し、芸術に対する理解を深める」である。授業外に行うべき学修活動（準備学修・事後学修）として、美術館・音楽会等に参加して芸術鑑賞を自らすすんで行き、学生自ら積極的に芸術に触れる機会を作るように勧めている<sup>(7)</sup>。

## 3. 筆者担当の授業内容と開講目的

筆者は芸術学において、「第1回 ガイダンス・オリエンテーション、第8回 芸術に関する映画鑑賞、第9回 楽曲解釈の多様性について～クラシック音楽編～、第11回 タンゴの世界～ポピュラー音楽編～、第13回 音楽会に行ってみよう、第15回 まとめ・レポート提出」を担当している。

授業開講時より、筆者は芸術、特に音楽が学生の琴線に触れるにはどういった授業展開が適切なのかを考えてきた。まずは本物が持つ力や凄さを学生とともに体感できる機会を設けたい。その上で、学生とともに「本物の音楽」とは何かを考えていく。「本物」とは何か。その条件の一つが「生演奏」である。生演奏を学生と聴くことで、「芸術の本質」に迫ることができるのではないかと考えたのである。

昨今では、テクノロジーの発達之恩恵で、過去の名演奏を気軽にインターネットを通じて視聴できるようになった。だが、生演奏の魅力は、創造される音楽の場をそこに在る者全員で共有することにある。それは、奏者も聴衆も演奏の当事者になるという事である。録音や映像をアンプやスピーカーなどの機器を通さずに「聴き」、その場で演奏する演奏者を「視る」ことが、生演奏においての重要な要素である。

そこで、この授業が新規開講された2015年度には、東海地方でのタンゴ・ヴァイオリンの第一人者である水野慎太郎氏（以下、水野氏と示す）を招いて「トーク&ライブ」を開催した。水野氏は、筆者の音楽仲間である。水野氏の演奏で、タンゴというジャンルを選んで学生に聴かせようと考えた理由はいくつかある。筆者が水野氏の演奏を大変素晴らしいと感じていること。そして、タンゴという音楽が人の感情を大変雄弁に表現するものであり、学生に受け入れられやすいと推測したからである。

細野（2011）はタンゴ音楽の魅力「草創期の古いタンゴは、まだ様式が定まっていなくて自由だ。ジャズっぽかったり。アメリカっぽかったり。ロマンティックで、ゆったりしている。キューバン・ラテンのような所もある。しかも切ないので、心に響くのだろう。」と説明する<sup>(8)</sup>。また、「黒猫のタンゴ」や「ラ・クンパルシータ」などの誰でもが一度は耳にした楽曲がある。百貨店のBGMとしてもコンチネンタル・タンゴが使われている。「タンゴ」は日常生活の一局面で自然に見聞きされている、という点も見逃せないであろう。

タンゴという音楽の馴染みややすさ、受け入れやすさは筆者自身も水野氏と José Hernán CIBILIS 氏（ホセ・エルナン・シビルス氏、以下ホセと示す）のライブに初めて接したときに体感した。その時、ほとんどの楽曲を初めて聴く状態であった。しかし、筆者は全く退屈や疲労せずに楽曲の描いた世界の虜になった。それは私だけでなく、周りの聴衆も同じようであった。これは、タンゴが「情熱」や「愛」を深く掘り下げ、人間の持つ普遍的な感情が率直に表現されている点、特徴あるリズムが繰り返される点、それでいて打楽器を用いないなどの編成の独特な点などが影響しているのではないかと考える。

そこで、筆者の授業担当分の「第11回 タンゴの世界～ポピュラー音楽編～」と「第13回 音楽会に行ってみよう」を複合させ、授業内での演奏会を企画・実施したのである。

## II 2016年度開講の芸術学

### 1. 2016年度開講、芸術学の概要と目的

筆者が2016年度に担当した芸術学では前節で一部を示した2015年度の授業内容に鑑み、①ホセと水野氏のタンゴ演奏会、②映画鑑賞：ティム・バートン監督『コープスブライド』、③音楽史にそってクラシックを鑑賞する（2限分）、の三つの内容を主にした授業を行った。

ホセと水野氏のタンゴ演奏会開催において、2015年度の学生による感想レポート結果をふまえて、開催目的を明確にした。

2015年度の授業では、水野氏のヴァイオリンと筆者のピアノでのタンゴ演奏会を開催した。

その結果、学生レポートには「生演奏に感動した」という回答が全回答者99名中58名（58.6%）、「クラシックやタンゴの演奏会を初めて聴いた」という回答が54名（54.5%）から挙げられた。具体的な感想内容を見ると、「タンゴに興味を持った」という回答が36名（36.4%）、「もっと聴いてみたい」という回答が30名（30.3%）から挙げられた。

2015年度の学生の感想レポートから推察するかぎり、学生たちは「初めて聴く生演奏に感動」している。しかし、「タンゴに興味を持った」「ヴァイオリンには様々な弾き方があるのだということを知った」という「知識獲得」が主な感想となっていたと考えられる。

生演奏への感動が知識獲得のみならず、さらに学生の「感性」に響き「感受」された感動が学生自身の言葉として発せられる主体的な鑑賞学習となるためにはどうしたらよいか。筆者は授業改善を次のように考えた上で行うことにした。

音楽には民族や国家、文化の差、地位や年齢、言語等を超えて、表現者と受け手である聴衆がストレートに分かり合える力がある。そして、演奏家の持つ深い知見や経験、洞察、インスピレーションなどが芸術への深い愛から生まれ、それが音の表現になって紡ぎだされる。そうした「本物」が持つ音楽の力や凄さを、筆者は生演奏の感動とともに学生に伝えたい。

2015年度に招聘した水野氏とともに“TANGO Duo CHIMERA”で活動するホセは、アルゼンチン出身である。タンゴ発祥の地、アルゼンチンで生まれ育ったホセと、アルゼンチンで修行した水野氏の演奏には、前述の「本物の凄さ」というべき力が宿っている。その力そのままに、水野氏とホセの演奏を学生たちの心、感性にぶつけてみたいと考えた。

マーセル（1934）は、「聴衆が演奏家から期待するものは（中略）心と心のふれ合い」だと音楽芸術の本質について述べている<sup>(9)</sup>。筆者は、生演奏において時間と空間を共有している演奏者と聴衆との間には、大きな「心の通い合い」が期待できると考えている。ホセと水野氏、二人の演奏を聴いた後、学生の意識上には確実に聴く前との変革が起きる。心のふれ合いが、そこに必ず起こるからである。その実体験を筆者は演出しようと考えた。心が動くこと、本物に感動する尊さを自覚する経験が、学生の心、感性を育むことに繋がってほしいと筆者は願ったのである。

また、学生たちが演奏に対する感想文を書いたり、友人と共有し語り合ったりすることも重要だと考えた。感動を言葉で表すことで音楽活動と言語活動の往還を図り、それが学生自らの気づきや印象の自覚と実感に繋がる。一見受け身に思える音楽鑑賞という行為が、実は大変能動的な行為になる。それがアクティブ・ラーニングの本質に合致するのではないかと筆者は考えたのである。

以上の学習目的をもって、2016年度はホセと水野氏を授業に招き、演奏会を開催することにした。前述のように、アルゼンチン生まれで現在はドイツ・ベルリンに居を構えて作曲及び演奏活動をしているホセは、タンゴ発祥の地であるアルゼンチンの文化的・民族的背景を礎にしたタンゴ解釈のオーソリティである。そして、彼独自のタンゴ解釈を西洋音楽の本場のドイツで音楽理論の上でも構築している稀有な存在である。

また、水野氏はクラシック・ヴァイオリンの研鑽を積み、チェコ・スロヴァキアやアルゼン



チンへの留学を契機にタンゴ・ヴァイオリンの世界に足を踏み入れた。現在は東海地方を中心にタンゴ・ヴァイオリンの第一人者として活躍するユニークな音楽家のひとりである。

そして、この二人のデュオの名前にもある“CHIMERA”（ギリシャ神話では、「頭はライオン、胴体はヤギ、尾はドラゴンで火を吐く怪獣」、奇怪な幻想・妄想、突然変異・複合体・接合体、などの意味を持つ）は、音楽に国境はないことの象徴である。彼らの生演奏を学生たちの柔軟な感性にぶつければ、感性の「化学反応」が起こるだろう。また、筆者の授業予定日の11月22日は二人が全国ツアーを終え、新しいCDアルバム作成に取り掛かる合間であった。本学での演奏を二人に快諾していただけたという大変な幸運にも恵まれて、演奏会は開演した。

## 2. 本物の音楽を聴く授業—ホセと水野氏の演奏会当日の概要

ここでは2016年11月22日2限（10時40分～12時10分）に、本学キャンパス725教室で行われたホセと水野氏による演奏会の様子について記す。

### (1) 演奏会の概要

ホセと水野氏には事前に、聴衆である学生たちの様子をみながら曲目については自由に演奏していただきたいと伝えた。演奏時間はおよそ60分程度とし、その後、学生との質疑応答と学生による感想レポートの作成を行うこととした。

10時40分、ホセ、水野氏、筆者が725教室に入室した。70名ほどの学生が着席していた。この日にホセと水野氏をお呼びして演奏会を行っていただくことは、9月の本授業のガイダンス時に予告していた。現実二人が教室に入ってくると、学生から驚きの様子が見られた。

ホセと水野氏、“TANGO Duo CHIMERA”のプロフィールが印刷された資料を配布した<sup>(10)</sup>。ピアノ、ヴァイオリン、譜面台の準備等で演奏会開始は11時00分となった。グランドピアノ設置場所の変更が出来ないので、下手袖側のピアノ設置位置はそのまま、ヴァイオリンはピアノよりセンター側の位置取りで演奏していただいた。

まず、水野氏がホセと自身の自己紹介をして、以下、①②の曲目を紹介した。

#### ① プレバレンセ／ピアソラ

ピアノ前奏が低音から徐々に始まる。情熱的かつリズムミクな前奏を経て、ヴァイオリンの低音メロディが憂いを含み絡んでくる。ホセも水野氏も未だパッションを押さえつつも、集中力を高め音楽に切り込んでいく印象。講義教室の演奏という事や、リハーサルなしという条件もあり、お互いの音を聴きあう感覚が未だじっくり来ていない様子であったが、聴衆としてはその様な状態は演奏に緊張感を与える部分もあり、大変興味深い。また、全国ツアーを終えられたばかりということもあってか、手探り状態でも演奏が乱れることは全くない。この曲の演奏終了後、ホセが水野氏の立ち位置変更を提案したが、ヴァイオリンの特性上立ち位置変更が出来ず、ピアノの蓋を半開にして演奏を継続した。どうやら、ピアノの音が拡散してしまうことによるアンサンブルのし難さという印象を、ホセは持っていたらしい。

## ② チャオ・パリス／ピアソラ

軽快さのあるリズムに乗って、切なさや思い出が交錯するような大人の音楽である。ホセの外連味の無いピアノに水野氏が見事に反応し、すでに演奏全開モードに突入した感があった。学生は大変集中して聴き入っていた。

演奏後、水野氏は冒頭の二曲ともがモダン・タンゴであったが、三曲目は「これぞタンゴ！」とでもいうべき「ラ・クンパルシータ」を演奏すると解説した。

## ③ ラ・クンパルシータ／ロドリゲス

ここでも二人の演奏は冴えわたった。ホセのリズムは揺らぐことなく、水野氏はそこに乗り、気持ちよさそうにメロディーを紡ぐ。即興的なやり取りも見られ、この場でしか実現しない一期一会的な演奏になっていると感じた。

『ラ・クンパルシータ』を聴いたことがある人」という質問を演奏後の水野氏は学生たちに投げかけた。学生10人ほどが手を挙げた。そして、次の曲の「ロス・マレアドス（酔いどれたち）」と「リア・チューロ」の曲紹介を水野氏が行った。「タンゴには歌曲が沢山あるが、それをインストゥルメンタルで演奏することもあり、今日はそのスタイルで演奏する」と学生に伝えた。

## ④ ロス・マレアドス（酔いどれたち）／コビアン

切なさや寂しさにさり気なく切り込んでいく。後半になると、情熱が迸り、力強い表現と変わっていった。

## ⑤ リアチュエロの霧／コビアン

様々な感情が交錯するのが、短調↔長調の転調で表現され、テンポの変化も相まって表情を変化させていくチャーミングな演奏。学生の様子にもリラックスマードが漂い出す。

ここで、演奏後の水野氏がタンゴのジャンルの多様性について説明した。その後、ホセにマイクを渡し、ホセが「みなさん、こんにちは」と日本語、スペイン語で学生に挨拶した。

その後、英語で喋り出す。ホセが笑うとなぜか学生からも笑いが出る。“Do you speak English?”とホセが学生たちにたずねると、また、笑いがおこる。「水野さんが通訳するから心配ないよ」と、ホセは学生に英語で伝えた。

水野氏の通訳で、ホセから「今日は、このような若い方々の前で演奏出来て幸せです。今朝は津波があってベストな日ではないかもしれないけれど、皆さんの前で一生懸命演奏しようと思います」と学生に伝えられた。英語のトークにしばしば日本語の単語を織り交ぜるホセのMCは、なぜか学生たちの笑いを誘う。「40日間、日本で過ごしましたが、毎日がとても貴重で刺激が沢山ありました。私のメインの仕事は作曲です。ピアニストとしても、もちろん活動しています」とホセの言葉が水野氏から伝えられた。

その後、水野氏にソロ演奏をすることを促され、ホセは「首の差」という短い曲を演奏することになった。「私は、紙に書いて作曲するばかりでなく、即興的に演奏することも多々あります。今から弾くのも即興的に演奏するものです」とホセは前置きした。

## ⑥ ポル・ウナ・カベサ（首の差で）／ガルテル

原曲のアウトラインにホセが即興でアレンジしたもの。ソロ演奏だと、メロディーも伴奏も全部ピアノですることになるので、ヴァイオリンとのアンサンブルの場合とでは音の創り方も変わってくる。ホセのピアノソロは、ベースの和声機能感とリズムの良さが抜群である。そして、弾きながら楽曲構成を俯瞰して演奏しているのがまた素晴らしい。

演奏が終わると、「かなりアレンジされていた」と、原曲を良く知る水野氏の解説があった。次は「あのね」という曲で、卓越したヴァイオリン奏者であったウーゴ・バラリス氏の作品であることが紹介された。

## ⑦ あのね／バラリス

嬰へ長調から始まったと思ったら、直ぐ転調を繰り返す。ウィットに富んだ冒頭である。テンポも目まぐるしく変化する。モダンな感覚と、作曲上の工夫が随所にみられる。作曲者が優れた演奏家であったことが想像に難くない。

演奏後、ホセと水野氏が一緒に演奏するようになったきっかけや、これまでの演奏歴について説明がなされた。そして、次の曲が今年のツアー中に作られた「くつべら」という曲だと紹介されると、学生たちから笑いがこぼれた。ホセが楽曲「くつべら」について解説した。今回の全国ツアー中に、ホセが「くつべら」にまつわるファンタジー・ショート・ストーリーを思いついたそうだ。半分実話で、半分はファンタジーだそうである。「私がある家にいて、くつべらを使っていた。そうしたら、くつべらが壊れてしまった。（ここまでが実話で、この後がファンタジー。）その家の女主人は、祖父の形見であるくつべらが壊れたことに怒って警察を呼んだ。女主人はくつべらが壊れたことを警察に捲し立て、ホセは弁解する機会を失った。実は警察は、女主人があまりにも早口だったので、その剣幕からホセが女主人の祖父を殺してしまったものと勘違いしてしまった。2日間、ホセは牢屋に抑留された。3日目にやっと英語の話せる警察官と話すことが出来、ホセが殺人を犯したのではなく、くつべらを壊しただけだったと伝えた。そこで、誤解が解けて警察が謝り、ホセは釈放となった。そして、『さようなら、また会いましょう』という警察に、『いえ、もう犯罪者扱いはこりごりで、会いたくないです』と言って別れた。この曲はホセの日本語による歌唱（即興、詠唱風）と水野氏のヴァイオリン（即興、基音：A音）によって演奏された<sup>(11)</sup>。

## ⑧ くつべら／シビスル

歌詞：「くつべら、くつべら、くつべら、自由、自由、自由。私は壊した。くつべらを壊した。日本で、日本で。でも気にしない、気にしない。くつべら、くつべら、くつべら。自由、自由。」冒頭は詠唱風に始まり、途中からアップテンポのヴァイオリンに合わせて「私は壊した～」とリズムカルに語り出す。この辺りで学生の笑いがあちこちで起こる。そして、「気にしない」という歌詞で笑いが再び起こり、楽しそうに聴いている学生の姿が印象的だった。

次に演奏する2曲を水野氏が解説した。演奏前にホセが急に喋り出した。「音楽には創造性がとても大切だ。楽譜通り弾くことではなく、楽曲を解釈することが大切です。自分の独自の発想を楽曲に込めることが重要なのです。それが、芸術の本質です。今からピアソラの曲を弾



きますが、これは、我々2人でないと出来ないオリジナルな演奏なのです。」

#### ⑨ マロン・アズール／ピアソラ

トークと演奏を繰り返すことで、聴衆である学生達との距離が縮まり、演奏にも聴き手にもアットホームな雰囲気が漂ってきていた。大変心地よい瞬間であった。ホセと水野氏がお互いの音を聴きあい呼び応じ創り上げる世界観が独特のものであることを、改めて実感させられる。

#### ⑩ エルデスパンゼ／ピアソラ

明るい曲調のヴァイオリンとピアノのユニゾンが印象的な楽曲である。

### (2) 演奏者へのインタビューとエンディング

演奏が終わり、時間も11時50分を過ぎたので、最後の1曲の前に、筆者がホセと水野氏にインタビューを行った。

筆者：まず、ピアノを始めた時期は？

ホセ：5歳です。母の勧めでした。長続きしませんでした。14歳の時にもう一度自分の意志で始めました。アルゼンチンで作曲、指揮、ピアノを学び始めました。

筆者：音楽はあなたにとってどのような存在ですか？

ホセ：感情、感動、心（Emotion）です。決して技術が大事なのではなく、心が一番大切です。

筆者：水野さんのヴァイオリンとの出会いはどのようなものだったのでしょうか？

水野氏：住んでいたマンションの両隣にヴァイオリンの先生が住んでいて、親に勧められて始めました。中学生くらいの反抗期の頃に一度止めてしまいました。大学受験の時に、芸術大学に進学しようと思い、再び始めました。クラシックの演奏の研鑽を積んできましたが、留学中にタンゴ・ヴァイオリンのレッスンを受けたことがきっかけで、タンゴの演奏をはじめました。10年前くらいのことです。

筆者：水野さんにとって音楽はどのような存在でしょうか？

水野氏：私はホセのようにまだ歳をとっていないですし、ホセのように「悟り」を開いていませんので（笑）、確信めいた答えはありません。職業であり、自分の気持ちを表現するものであり、自分の一番大事なものです。

この後、筆者によって、筆者と水野氏、ホセとの出会い、お二人の演奏の素晴らしさなどについて述べた。そして、最後の曲として「グリセール」の演奏があった。

#### ⑪ グリセール／モーレス

男女の愛と別れを題材にした、切ない内容のタンゴ歌曲。ホセのピアノも水野氏のヴァイオリンも教室の音響にマッチして、充実した響きになっている。60分を超えるトーク&ライブはしっとりとした雰囲気で幕を閉じた。この後、ホセと水野氏を囲んで、出席学生全員と記念撮影を行った（写真は本稿17頁に掲載）。

### 3. 学生レポートにみる当日の授業のふりかえり

次に、11月22日に開催したホセと水野氏の生演奏会当日の学生の感想レポートの結果を示

したい。特に、先に示した筆者の開講意図が学生にどのように受けとられたかに注目したい。

## (1) 回答者

授業を行った2016年11月22日の出席者71名が、ここで分析する感想レポートの回答者である。よって感想レポートの回答者は71名であり、提出されたレポートにはすべて当日の演奏についての感想が書かれていた。

## (2) 回答の内容

演奏会に対する感想として書かれた記述を、①「当日の演奏プログラムについて」②「演奏を聴いた感想・印象に残ったこと」③「演奏会全体の感想・印象に残ったこと」に分類し、分析を行った。

### ① 「当日の演奏プログラムについて」

当日学生に配布したプリントには、演奏者のホセと水野氏の略歴、また二人が結成している“TANGO Duo CHIMERA”の説明のみを示した。演奏される曲名という「知識」をあえて伝えないために、演奏者の略歴だけを示したプリントを学生に配布した結果、「当日の演奏プログラムについて」に対する感想レポートの回答者71名のうちのほとんどの学生が、一般的にはスタンダードだと考えられるタンゴ曲についても曲名を示していなかった。たとえば、「ラ・クンパルシータ」については71名中4名(5.6%)が、その曲名や「聴いたことがある」といった感想を記述していた。演奏プログラムにおいてコメントが多く示されたのが、ホセと水野氏が即興で演奏した曲「くつべら」であった。40名(56.3%)がその楽曲について、「面白かった」「ユニーク」「日常の些細なことから壮大な物語が生まれていて感動した」といった感想が挙げられていた。

### ② 「演奏を聴いた感想・印象に残ったこと」

「当日の演奏を聴いた感想・印象に残ったこと」として、回答者から最も多く挙げられていたのは、タンゴのヴァイオリンとピアノによる生演奏を「初めて聴いた」という回答であった。回答者71名のうち59名(83.1%)が「初めて、生演奏を聴いた感動」を記述していた。また、次に多く挙げられていたのが演奏者のホセについて記述された回答だった。回答者のうち54名(76.1%)が「ホセの演奏や人柄、トーク中の言葉を聞いての感動」について記述していた。

「ピアノとヴァイオリン演奏の素晴らしさ」についても、47名(62.2%)が記述していた。演奏については、水野氏が奏でる「様々な音色・奏法に驚いた」という回答が29名(40.8%)あった。演奏会に対する要望として、「もっと演奏を聴いていたい、このままずっと聴いていたいと思った」という回答が31名(43.7%)あった。

### ③ 「演奏会全体の感想・印象に残ったこと」

「演奏会全体の感想・印象に残ったこと」として、44名(62.0%)が「感動した」という言葉を記述していた。また、演奏会中にホセが学生に伝えた「ピアノは技術よりも、表現者の思い、心が大事」という言葉から、「自分も心を大事にしてピアノが弾きたい」という感想が25

名（35.2%）挙げられていた。また、ホセと水野氏の「二人にしかできない音楽」であることに感動したという回答が14名（19.7%）あった。その他、「タンゴに興味を持った」という回答が6名（8.5%）、「私もいつかホセのように心を大事にした演奏を子ども達に聴かせたい」という将来の自分の目標について示した回答が3名（4.2%）から見られた。

### (3) 全体を通して

回答者から挙げられた意見から、授業内容は概ね好評であったことが分析結果からわかった。特に、「初めて、生演奏を聴いて感動した」という学生が多く、「ホセのピアノは技術よりも、表現者の思い、心が大事だ」という言葉に感動したという学生が多かった。

また、「楽曲について知る・理解する」ことよりも、実際に間近で見られる生演奏でしか得られない『くつべら』という即興の曲がとても面白かった」「ヴァイオリンには様々な音色・奏法がある」ということを学びとする学生が多かったと考えられる。さらに、「もっと聴いてみたい、このままずっと聴いていたい」という要望が多く示された。これは、学生達が大変集中して演奏に聞き入っており、演奏に大きな魅力を感じて心を動かされる心地よさを体験したといえる。二人の演奏者に対する最大の賛辞であるとともに、今後学生たちが能動的に演奏会などに足を運ぶ意識づけの素地になったとも考えられる。

ホセの人柄についての感想が多く寄せられていたことについても注目したい。千住(2014)は、芸術家の人間性について、次のように示唆している。「芸術は、人と人の共通項で語りかける、『あなたはひとりではない、私もひとりではない、同じ人間どうしだから必ずわかりあうことができる』とするコミュニケーションです。そして、芸術は、同時に世の中や人の多様性を教えてくれますし、『様々な考え方があるから、自分も変わっていていいのだ』ということに気づかせてくれます。」<sup>(12)</sup>

かつて、著名なピアニストのスビャトスラフ・リヒテル氏は、自分の演奏するピアノを造る工場の一隅で、工場で働く方々に向けて演奏会を開き、ピアノ技術者たちはその演奏に酔いしれたという<sup>(13)</sup>。ホセや水野氏のような素晴らしい芸術家が、大学の授業時間に講義教室で演奏を繰り広げ、笑顔で学生たちとコミュニケーションする姿を目の当たりにすることが、学生の芸術への興味や関心を喚起したといえる。

## Ⅲ 「本物の音楽を聴く」を大学の授業で行う意義

### 1. 2016年度開講した芸術学全体における生演奏の学生評価

Ⅱでは、11月22日に開催したホセと水野氏の生演奏会当日の学生の感想レポートの結果を示した。ここでは2016年12月28日に行った筆者担当分の芸術学全体の感想レポートにおける「本物の音楽を聴く——ホセと水野氏の演奏会」についての学生評価を示したい。

## (1) 回答者

授業を行った2016年12月28日の出席者は107名であった。筆者担当分の芸術学全体の感想レポート（以下、感想レポートとする）を出席者に記入するように指導したところ、ホセと水野氏が演奏会を行った11月22日に授業に参加した学生が55名であった。当日の欠席事由は、施設実習日や実習事後訪問日であったということだった。

## (2) 回答の内容

筆者担当分の芸術学全体において、2016年12月28日当日の出席者107名に対し、まず、「①ホセと水野氏のタンゴ演奏会 ②映画鑑賞、ティム・バートン監督『コープスライド』 ③音楽史にそってクラシックを鑑賞する の3回分の一言感想」と、「どの回が最も印象に残っているか」をたずねる授業レポート作成を授業の最後に行った。

当日の出席者107名のうち、ホセと水野氏が演奏会を行った11月22日に授業に参加した学生が55名であった（残りの52名は演奏会当日欠席で演奏会を聴いていないため、①が選択不能であるため、以下の分析対象から外した。ただし、欠席者であっても「友達から聞いて、演奏会が聴きたかった」と回答した学生は2名いた）。

回答者55名のうち、①「ホセと水野氏のタンゴ演奏会（以下、演奏会とする）」が一番良かったとした回答者は48名（87.3%）であった。②「映画鑑賞、ティム・バートン監督『コープスライド』」が一番良かったとした回答者は4名（7.3%）、③「音楽史にそってクラシックを鑑賞する」が一番良かったとした回答者は2名（3.6%）、無回答は1名（1.8%）であった。

演奏会の一言感想として書かれた記述については、①「生演奏に感動した」、②「ホセと水野氏の演奏に感動した」、③「その他」に分類し、分析を行った。

### ① 「生演奏に感動した」

演奏会を行った11月22日当日の学生レポートにおいて、回答者71名のうち59名（83.1%）が「初めて、生演奏を聴いた感動」を記述していたことは先に示した。演奏会を開催して約1ヶ月後であった12月28日に行った筆者担当分の芸術学全体の感想レポートにおいても、回答者55名のうち37名（67.3%）が「生演奏に感動した」と回答している。また、その回答で「生演奏を初めて聴いた、生演奏を聴く機会はなかなかない」と記述していた回答者は20名（36.4%）であった。

### ② 「ホセと水野氏の演奏に感動した」

演奏会を行った11月22日当日の学生レポートにおいて、回答者71名中47名（62.2%）が「ピアノとヴァイオリン演奏の素晴らしさ」について記述していたことは先に示した。12月28日に行った筆者担当分の芸術学全体の感想レポートにおいても、11名（20.0%）が「二人の演奏に感動した」と回答している。また、ホセと水野氏が即興演奏した『くつべら』が良かった」と回答した記述が2名（3.6%）あった。

### ③ 「その他」

その他の回答として、「タンゴが知れた」という回答が3名（5.5%）、「普段、音楽会を聴く

機会がないので面白かった」という回答が2名（3.6%）あった。

### (3) 全体を通して

演奏会当日と演奏会後、約1ヶ月後に行った筆者担当分の芸術学全体の感想レポートを比較してみると、学生の印象に残る感想として一番多い回答が「生の演奏に感動した」といったものであった。特に、生の演奏会を「初めて聴いた」「なかなか聴く機会がない」という回答が、筆者担当分の芸術学全体の感想としても多く見られたことから、「生演奏を聴く機会」の貴重さが学生にとって非常に印象深く心に残ることがわかった。

また、タンゴの「楽曲について知る・理解する」ことや「楽器の様々な音色・奏法」自体よりも、本学で演奏会を開催したホセと水野氏という「二人の演奏の美しさ」に感動し、その印象を深く心に残した学生が多かったと考えられる。これらの感想から、「もっと聴いていたい、ずっと聴いていたい」「この演奏会を聴けたことだけでも、芸術学にとって良かった」という感想が示されていたことについては、一流の芸術家の生演奏が何にもまして力・影響力を持っていることの証明ではないかと考えられる。

このように学生アンケートからみると、生演奏会から一定期間を置いた後でも、その印象は筆者が意図した以上に学生達の反応は大きいものであった。これは、多感な時期に本物の芸術に触れることの意義や、その計り知れない大きさを物語っているのではないかと考えられる。

## 2. 大学講義での演奏会への演奏家自身からの評価——水野慎太郎氏と José Hernán CIBILS 氏へのインタビューから

ここまで、学生からの授業評価についてまとめてきた。最後に、この生演奏会を行った水野氏とホセから、大学講義における演奏会への演奏家としての評価を二人へのインタビューからまとめておきたい。

### (1) 水野氏へのインタビュー——学生たちの前で演奏するにあたっての気構え、学生によるアンケート結果について、「本物」の音楽について考えること

#### ① 当日の詳細

筆者：ホセと水野氏が今回本学で演奏するにあたり、何か特別な思いはありましたか？

水野氏：学生さんたちに聴いていただくのは、とても嬉しいことですが、演奏の冒頭では少し緊張しました。学生さんたちが「授業」として参加しているという事や、感受性が柔軟な時期であるという事をこちらが意識するせいかもしれません。好奇心旺盛な目で見られている感じがしましたし、学生さんたちが演奏に対して純粋に楽しんでいる様子が伝わってきたので、集中して演奏が出来た気がします。何か、自分たちの演奏に対して感じてもらう部分があれば良いなと思い演奏しました。

筆者：ヴァイオリニストはピアニストと違って聴き手の様子が目に入ってくるといいますが、学生たちの聴いている様子はどのように目に映りましたか？



水野氏：主観的な印象ですが、学生さんたちは、普段聴き慣れないジャンルの音楽に対して集中して楽しんでいるように感じました。

筆者：ホセはどうだったのでしょうか？

水野氏：若い世代の学生さんたちに、心から何かを伝えたいという強い気持ちを常々持っているようです。その一つが「音楽において大切なことは、技術ではなくて感情だ」ということです。ここからは想像ですが、ホセは現代において失われた芸術の本質について、若い世代の方々に自分の演奏で問いかけて、反応を見たいのではないのでしょうか。

筆者：大学の講義教室での演奏は、音響や設備等でのやり難さはなかったのでしょうか？

水野氏：特にありません。

筆者：演奏終了後に、お二人で何か感想などを話しましたか？

水野氏：学生さん達の前で演奏したことは良かったと、二人で確認しました。結果的には普段の演奏会と演奏するスタンスは全く同じでしたので、演奏会を終えた充足感を味わいました。

## ② 学生アンケート結果についてのコメント

筆者：2015年度と2016年度の学生アンケート結果の違いについてお考えはありますか？

水野氏：学生さんたちの、ホセに対するインパクトの違いが大きいのではないかと思います。

筆者：「くつべら」、「生演奏」、「ホセのトークと演奏」というキーワードに関するアンケート結果が特に多いようです。

水野氏：「私もいつかホセのように心を大事にした演奏を子ども達に聴かせたい」との回答には驚きます。「ホセパワー」というか、ホセのメッセージが学生さんに届いたのだなと感じます。

筆者：ホセの魅力はどういった部分なのでしょう？

水野氏：非常に感覚的な音楽家だと思います。人柄も素晴らしいですし、一緒に演奏していると安心感もあります。

## ③ 演奏家として考える「本物の音楽」とは

筆者：「本物」の演奏とは水野さんにとってどのようなものなのでしょうか？

水野氏：例えば、ハイフェッツ（1901～1987、20世紀を代表するヴァイオリニスト）の演奏を聴くと感動します。それは、音楽への「愛」が自身の確固たる表現方法や法則により表現されているからだと考えます。亡くなった志賀清氏のタンゴ・ヴァイオリンも素晴らしい。しかし、「本物」ということになると、概念自体の定義も難しい。素晴らしい演奏を分析すると、過去からの伝統の線上に存在する気がします。現代の音楽シーンだと、本質的でない評価も混じってきているのかも知れません。だから、「本物」って何だろうという疑問が首を擡げるのでしょうか。評価が絶対的に定まっていれば疑問を挟む余地が無いですからね。

筆者：そもそも、「学生に『本物』の演奏を聴かせたい」という発想を発露として授業内で「生演奏」を聴かせようと考えた企画なので、ホセと水野氏をお呼びしたのです。私の中には、この演奏会をクラシック音楽だけで構成すると、学生に拒否反応が出るように推測しているのですが、いかがお考えでしょうか。

水野氏：そういうこともあるかも知れません。

筆者：学生に「生演奏」を聴かせることにこだわりを持って授業展開をしているのですが、水野さんは「生演奏」についてどのようなお考えでしょうか？

水野氏：物理的な視点で言えば、デジタルの世界は可聴域以外の音が間引きされていますのでその影響はあると思います。そして、演奏の場を演奏者と聴き手で共有することは、ある意味では真剣勝負です。もし、演奏が気に入らないとしても、「気に入らない」という感情を持ちながらその場に居るということ自体、非日常の世界で意味のあることなのではないでしょうか。

聴衆も演奏者も人間ですから、お互いの生きている生活のリズムや考え方が生演奏においてぶつかったり、音を通してお互いが共感しあったりすることがあると思います。お互いの感覚にストンと落ちることが生演奏の場合起こりやすい気がします。映像やCD等を視聴する場合は一方通行の刺激ですが、生演奏の場合は交互通行です。会話に置き換えると、一方通行の場合は2次元的で、リアルな会話ではないですね。

筆者：今、交互通行というキーワードが出されましたが、色々な演奏の場面で交互通行を意識することはありますか？

水野氏：私もホセも、場所や時間などの条件によって生き物のように演奏が大きく変化していきます。生演奏は「実験」のような面があるのでしょうか。やってみないとどうなるか分からないような。そこが大きな刺激ではないでしょうか。

筆者：“Live”は「生」、「生きている」ということですからね。

水野氏：はい。タンゴの場合は歌詞がある曲が多いですね。ライブで楽曲を演奏する前に、歌詞の内容を説明することがよくあるのですが、聴き手は楽曲と自分の人生を照らし合わせて追体験するように演奏を聴くことになります。演奏者と聴衆が「音による会話」を出来たら良いなと思いながら演奏をしています。クラシックとは違うパーソナルな世界観もタンゴの魅力ではないでしょうか<sup>(14)</sup>。

## (2) ホセへのインタビュー——「生演奏」を聴く意味、「本物の音楽・芸術」について、「音楽・芸術」が我々にもたらすもの

### ① 「生演奏」を聴く意味

筆者：生演奏は、テレビやDVDの視聴に比べ、何を聴き手にもたらすのでしょうか？

ホセ：生演奏は常に特別なものです。それは勿論、どのような種類の音楽を聴くかによっても左右されます。例えば、ロックのコンサートを聴くのと、ワーグナー、ヴェルディ、ムソルグスキーのグランド・オペラを聴くことは同じではありません。また、このような音楽でも iPod で地下鉄で聴くのと、CD を家で聴くことも違う体験でしょう。置かれている状況が完全に違うのです。コンサートホールでは、椅子に座り、そこにいることが強要されます。聴く以外にすることがない状態です。そして、そういった状況下で音楽が我々を圧倒することがあります。大きな感動を得る。これは、場合によっては家で音楽を聴く場合でも起こり得ますが、通常、家で音楽を聴く場合はそこまで集中しているわけではありません。それに加えて、演奏会場(私の場合は、ベルリンのフィルハーモニーホールをイメージするのですが)では、我々は一人で

聴くわけではありません。多くの人々がそこにいて、同じものを体験するわけです。そういう状態は、聴衆に「エネルギー」をもたらします。そして、私たちにそれが蓄積されるのです。そして、生演奏には会話、言うならば音楽による沈黙のコミュニケーションが存在するのです。

## ② 演奏家として考える「本物の音楽」とは

筆者：「本物」の音楽、「本物」の芸術とは何でしょうか？

ホセ：この質問に答えるのは、今日ではほぼ不可能でしょう。ですが、私はあなたに、私にとっての「本物」が何なのかをお答えします。他の方々は全く別の意見を持つことでしょう。私にとって（主観的な回答です）「本物」とは、精神と精神が交流することです。頭だけで理解したり、長い説明があることではないのです。あなたは、今日では世界の主要な美術館で全てを観ることが可能です。「ゴミの山」「何時間も椅子に座る女性」「針の穴から肌を晒す女の子」等々。全てが芸術です！（と呼ばれます）。私自身、これらを全て観ました……。音楽の中にも（あなたは良く解ると思いますが）、所謂騒音も今日では音楽として注目されます。幸いなことに、このような「芸術」という方法は比較的少数の人々にしか届きません。演奏会に訪れる大部分の聴衆は、今なおシューマン、ワーグナー、オリヴィエ・メシアン、バルトーク等々を欲しています。又は、現存の作曲家の良い作品もですが。そういう物もあります。

## ③ 「音楽・芸術」が我々にもたらすもの

筆者：音楽や芸術は、我々に何をもたらすのでしょうか？ ホセの考えを教えてください。

ホセ：音楽と芸術が私に何をもたらすか。私が思うにそれは、しばしば、ほぼ宗教的な体験のようなものです。素晴らしい音楽を聴いたり、偉大な展覧会を観ると、私の精神に栄養が与えられ、勇気が出て、癒されます。あなたも、ベルリンでは多くのギャラリーや博物館に行っただしょう。私は新国立博物館に行くたびに、信じられないくらいに素晴らしい「芸術」を楽しむことで、大いなる喜びを得ています。パリやアムステルダム（ゴッホ美術館）など、多くの式典で音楽が使われます。全ての宗教で音楽が使われています。特に音楽は言葉や理屈によらないで、我々を通い合わせてくれます。音楽は私たちに閃きを投げかけます。勿論、感受性にもよりますが。具体例で示すなら、映画「アマデウス」（モーツァルトの生涯）を思い出します。あなたは観ましたか？ 素晴らしい映画です！

これが私の考えです。充分でしょうか。このことについては、私もこれからも考えます<sup>(15)</sup>。

## 3. 授業担当者からの評価と考察——本物の音楽を本学の学生が聴くことの意義

ここまで、学生アンケートおよび演奏者自身による2016年度開講の芸術学において、生演奏会を開催したことへの評価を示してきた、学生アンケートにおいては、生演奏とDVD等の視聴の学生たちに与える影響力の違いが明らかとなった。また、学生が素晴らしい芸術家の生演奏を能動的に鑑賞することで、演奏者の精神と聴き手の精神が相互に通い合うことが確認された。ホセが述べているように、芸術は理論的な理解を超えた言語などによらないコミュニケーションである。そして生演奏の場にいるすべての人々は、その力や凄さに圧倒される。食物が身体栄養であるように、芸術は心の栄養である。今後、学生たち自身が得た感動を客体化し、

芸術による豊かさの体験について思いを巡らせることだろう。そうなれば、保育・教育現場における芸術教育の在り方と重要性について、学生たちがそれぞれに信念と確信を持てることにつながるのではないかと考えられる。

2015年度に新規開講となった「芸術学」は今年度で2回目の授業を終えることとなる。今年度より本学のカリキュラムの変更があり、この授業は科目群「人間を知る」の中の科目名「芸術の世界」として、一年生前期の選択科目として引き継がれることになり、結果として、今年度は前期に1年生対象の「芸術の世界」、後期に2年生対象の「芸術学」の授業を行った。

2年生後期開講科目から1年生前期開講科目に替わることによる影響は現時点では未知数である。しかし、この芸術を扱う授業が学生の感性や感覚に与える影響は大きなものである。

今後の課題としては、より能動的に学生の授業への自覚的な参加をいかに促すかということがある。また、授業開講時に演奏家のスケジュール調整がつくとも限らない。それに加え、学生が「生演奏のオーケストラを聴きたい」などの希望を持った時、それを特に予算措置などの面でどう実現できるのかということもある。筆者としては、保育学部のゼミ委員会が主催する「芸術鑑賞会」と授業を一体化させ、大規模な生演奏の音楽会に繋げるなどの可能性を探りたいと考える。今後も授業アンケートの精読と分析を継続し、より充実した授業展開に繋げていきたいと考える。



写真 受講学生とホセと水野氏（演奏後の記念写真）

## おわりに

本学園の建学の精神は「気品に富み、洗練された近代女性の育成」である。また、4年制大学である本学部の使命・魅力は、社会的に有用な教師・保育士の育成のみならず、「人間力」の備わった、自己実現可能な底力を持った社会人の育成ではないかと考える。そのような背景もあり、芸術学の授業が新設されたと考えている。

今後は「芸術の世界」（1年前期開講、選択授業）に置き換わるこの授業が、未来を担う学生たちの心の栄養となり、更に次世代へ、「人類の持った最も素晴らしく、美しいものである芸術」が伝達・伝承されていくことを望んでやまない。

## 謝辞

本稿を執筆するにあたり、2015・2016年度の芸術学を選択した学生の皆さん、本学で演奏していただいた水野慎太郎氏と José Hernán CIBILS 氏、そして桜花学園の皆様には多大なるお力添えをいただいた。ここに心からの感謝の意を述べたい。有難うございました。

## 註

- (1) 鶴見俊輔 1999『限界芸術論』ちくま学芸文庫、10頁。
- (2) 佐々木正美 2016『子どもの心の育てかた』河出書房新社、112頁。
- (3) 白井学 2016 教育課程研究会編『「アクティブ・ラーニング」を考える』東洋館出版社、180-181頁。
- (4) 天笠茂 2016「アクティブ・ラーニングを考える——着眼点としての能動的であること」『日本教育』第454号、6頁。
- (5) 小林昭文 2016『図解 アクティブラーニングがよくわかる本』講談社、69頁。
- (6) 白井学 2016 教育課程研究会編『「アクティブ・ラーニング」を考える』東洋館出版社、180-181頁。
- (7) 桜花学園大学 2016『学習の手引き 2016年度版（平成28年度版）』、105頁。
- (8) 細野晴臣 2011『アンビエント・ドライヴァー』マーブルトロン、170頁。
- (9) マーセル 1934/ 美田節子訳 1967『音楽教育と人間形成』音楽之友社、23頁。
- (10) 当日学生に配布した演奏者のプロフィールは以下のとおりである。

“TANGO Duo CHIMERA” はドイツ在住アルゼンチン作曲家 José Hernán CIBILS（ホセ・エルナン・シビルス）と愛知在住のバイオリニスト水野慎太郎によるアルゼンチンタンゴを母体とした Duo である。二人は2012年に初めての日本ツアーを成功させ、年に一度のペースでこれまで5回のツアーを行い各地で好評を得ている。レパートリーは古典から現代タンゴ・自作曲・即興・日本の唄・タンゴ無伴奏曲など、これまで60曲以上録音し、今年は5枚目のCD発売記念ツアーとして約1ヶ月をかけて日本をまわる。また、今回はアストル・ピアソラのマイナーな作品にも焦点を当て、二人のカラーを十分に生かしたプログラムを予定している。海を渡り出会った、親子ほどに年の離れている音楽家による甘美で刺激的な音をご堪能ください。

José Hernán CIBILS（ホセ・エルナン・シビルス）氏（ピアノ）

サンタフェ（アルゼンチン）出身。ベルリン（ドイツ）在住。プエノスアイレスのカトリック大学、ベルリンのハンス・アイスラー校でピアノ、作曲、指揮を学ぶ。チャランゴ奏者のパトリシオ・ゼオリ氏とのユニット「ピアランゴ」で2009年初来日。その後2度に渡り日本横断コンサートを行う。また、ベルリンフィルハーモニー奏者と【TANGO FILAMONICO】を作り活動。南米のリズムとクラシック音楽を融合させた高い音楽性は注目を浴びている。

水野慎太郎氏（ヴァイオリン）

愛知県みよし市在住。鈴木メソッドにてヴァイオリンを始める。名古屋芸術大学音楽学部器楽科卒業。チェコ共和国ブラハコンセルバトワールへ留学。その後アルゼンチンへ渡り、タンゴヴァイオリンをピアソラ五重奏団最後のヴァイオリニスト、フェルナンド・スアレスパス氏に



師事。現在フリーの演奏家として主にタンゴ、クラシック分野で活動中。2012年、無伴奏タンゴソロアルバムをリリース。年に一回のピアノ奏者ホセ・エルナン・シビルスとの演奏ツアーで、これまでに4名のDuoアルバムを作成。2016年も10月末よりCD発売ツアーを予定している。

- (II) ホセによる「くつべら」の解説及び物語内容は次の通り。原文と次に筆者による翻訳。

KUTSUBERA Alles begann mit einem realen Ereigniss: bei den Eltern von Shintaro habe ich tatsächlich einen “Schuhanzieher” (kutsubera) benutzt und dabei kaputt gemacht. Es war aus Kunststoff und nicht sehr solide. Es war ein bisschen peinlich für mich. Du weißt, ich bin immer etwa unsicher in Japan und passe auf, die vielen Regel und Bräuche der japanischen Kultur nicht zu missachten... So, mit dieser Sorge in meinem Kopf und nachdem ich wusste, dass die Kutsubera nicht wertvoll war, wollte ich eine neue kaufen. Aber dann entstand die Idee, etwas musikalisches daraus zu Schaffen. Einfach weil das Wort “Kutsubera” ständig in meinen Gedanken war und gut klang. Schon seit unserem ersten Auftritt machten wir eine Improvisation mit Geige und Voice über Kutsubera Dabei erzählte ich eine fantastische Geschichte. Ich sagte, dass ich in einem Haus eingeladen war, wo ich vielleicht zu viel trank und beim Weggehen und die Schuhe Anziehen, eine Kutsubera zerbrach. Wütend kam die Frau des Hauses und protestierte laut. Sie beschuldigte mir, die alte Kutsubera des Grandfathers zerstört zu haben. Dann kam auch ihre Tochter (die Kendo Meister war) und schlug mit hart auf dem Kopf mit dem Kendo Stick. Daraufhin riefen sie die Polizei und ich wurde sofort verhaftet. In der Konfusion dieses Momentes und die Schreie der Frauen niemand verstand wirklich was passiert hatte. Ich war drei Tage lang in einem dunklen Zelle, wo ich kaum was zum Essen und Trinken bekam. Am dritten Tag kam zufällig ein Aufseher vorbei und fragte mich, warum ich da war. Ich antwortete: weil ich eine Kutsubera kaputt machte... Oh, sagte der Polizist, entschuldigen Sie! Wir dachten, Sie hätten einen alten Grandfather getötet!! Nein, es war die Kutsubera des Grandfathers!, erwiderte ich So wurde ich endlich freigelassen und konnte weiter machen mit dem Tournee... Ha ha, ok, das ist was ich jedes Mal erzählt habe bevor wir die kurze Komödie spielten, so wie du es gehört hast in deiner Klasse. Viele Leute fragten mir ernst, ob die Geschichte war wäre. So habe ich vorsichtshalber deutlich erklärt, es wäre nur eine Fantasie...

「くつべら」の物語は実体験から始まります。慎太郎さん（筆者註：水野氏のこと）のご両親のお宅で靴べらを使おうとして壊してしまいました。プラスチック製で頑丈じゃなかったのです。私は少し心苦しく感じました。私は（君も知るように）日本の文化における決まりや慣習が分からないことがあるので、いつも失礼のない様に気を付けているのですが……。壊れた靴べらはそれ程高価なものでもないと言われたのですが、申し訳ないので弁償しようと思っているところに、一つのアイデアが首をもたげました。お詫びの気持ちを音楽で表現して捧げてはどうか、と。「くつべら (Kutsubera)」という単語は言葉の響きが素敵だし、なにしろ私の気持ちにじっくり来たのです。実は、慎太郎さんと私は最初のツアーからヴァイオリンと声による即興を行っていたので、今回も「くつべら」をテーマにファンタジックな物語を創ってみたのです。

～ばくが、あるお家にお呼ばれた時、ちょっと飲みすぎちゃったんだ。それで、帰りに靴を履くとき、くつべらが折れちゃったんだ。激怒した奥様が捲し立てた。彼女は、その古いお祖父さんの形見のくつべらが壊れたことで、私を責めたのだ。剣道の達人の娘までやって来て、私の頭を竹刀で叩いたんだ。その上警察まで呼んで、僕は逮捕されちゃったんだ。現場は混乱していて、奥様は叫んでるし、誰も何が起こったんだか分からないような状態だったんだよ。僕は、飲まず食わずで3日間も暗い牢屋に幽閉されたのさ。3日目に思いがけずに通りかかった看守に、何で捕まったのかと聞かれたんだ。それで、くつべらを壊したからだよって答えたんだ。「おお、なんてこった、ごめんなさい」って。お祖父さんを殺めたと

誤解していた!! と、その警察官は謝ったんだ。「いえ、くつべらがお祖父さんの物だっただけです!」と弁明した僕は、やっと釈放されて、今こうして演奏旅行を続けてるんだ……

～  
ははは。わかりましたか。これが、君が大学の授業でも聴いたコメディーク小品を演奏する前に毎回説明しているお話です。沢山の方々が真剣に、このお話が真実なのか質問されました。だから、私は半分真剣に、且つハッキリと、「これはただのファンタジーです……」って言うのです。(訳:筆者)

- (12) 千住博2014『芸術とは何か——千住博が答える147の質問』祥伝社、268頁
- (13) 音楽の手帖1980『ピアノとピアニスト』青土社、176頁
- (14) 2017年1月5日に行った筆者による水野氏へのインタビュー記録より引用。
- (15) 2017年1月6日にホセよる筆者に送られたメッセージより記載。

## 参考文献

浅香淳(編)1966『標準 音楽辞典』音楽之友社

## 附記

以下、本文中に示したホセへのインタビューの原文を示す。

Lieber Jose! Ich habe einige Frage (beim meine Abhandlung über die Kunst zu schreiben.).

1, Was bringt zu Zuhörer eine “Live” Musik,vergleichen mit TV oder DVD zuschauen. Was denkst du darüber?

1) Live Musik ist immer was besonderes. Es kommt darauf an, was für Musik wir hören, natürlich. Es ist nicht dasselbe eine große Oper von Wagner, Verdi, Mussorgsky, z.B. live zu erleben als ein Rock Konzert. Es ist auch nicht egal diese Musik mit einem iPod in der U-Bahn oder zu Hause mit einer CD zu hören. Die situation ist völlig anders. In einem Konzert Saal wir müssen sitzen und da bleiben. Wir haben nichts anderes zu tun als hören. Und manchmal passiert, dass die Musik uns überwältigt, wir können ein großes Erlebniss haben... Das kann auch eventuell zu Hause passieren, aber normalerweise sind wir nicht so konzentriert. Außerdem in einem Konzert Saal (ich denke immer an die Philharmonie, in Berlin) wir sind nicht allein. Sehr viele Leute sind auch da und erleben dasselbe. Da passiert es was mit der “Energie” der Zuschauer. Es summiert sich zu unserer. Und es gibt einen Dialog, eine stillschweigende Kommunikation mit den Musikern, die da spielen.

2, Was ist die “Echte” Musik,und “Echte” Kunst?

2) Diese Frage ist heutzutage fast unmöglich zu beantworten. Ich kann dir sagen was für mich “echt” ist. Aber manche Leute werden total andere Meinungen haben. Für mich (subjektive Antwort) “echt” ist eine Kunst die von Seele zu Seele wandert. Und nicht etwas, dass nur im Kopf entsteht und viele lange Erklärungen braucht... Du kannst heute in allen wichtigen Museen der Welt alles mögliche sehen: ein Haufen Müll; eine Frau, die auf einen Stuhl stundenlang sitzt; ein Mädchen, das nackt sich präsentiert und seine Haut mit Nadeln durchbohrt, usw. Alles ist Kunst! (wird es gesagt). Ich habe all das persönlich gesehen... Auch in der Musik, du weißt es genau, irgendwelche Geräusche können heute als Musik betrachtet werden. Zum Gluck, diese Art von “Kunst” erreicht relativ wenige Leute. Die meisten, die zu einem Konzert gehen, wollen immer noch Schumann, Wagner, Olivier Messiaen, Bartok, etc., etc., hören. Oder auch gute Musik von lebenden Komponisten. Das gibt es auch!

3, Was bringt uns die Musik oder die Kunst? Ich möchte wissen, wie du denkst.

3) Ich kann dir sagen, was die Musik und die Kunst mich bringt: es ist manchmal fast eine religiöse Erfahrung. Meine Seele fühlt sich ernährt, ermuntert und geheilt, wenn ich wunderbare Musik höre oder eine grandiose Ausstellung von Bildern sehe. Sicherlich warst du in Berlin in einigen der vielen Galerien und Museen. Ich habe große Freude gehabt, jedes mal dass ich in der Neuen National Galerie war, z.B. Da habe ich unglaubliche "Kunst" genießen dürfen. Aber auch in Paris, Amsterdam (Van Gogh Museum), und wo anders Nicht umsonst sind die religiöse Zeremonien immer von Musik begleitet. In allen Religionen. Die Musik insbesondere (glaube ich) öffnet Wege in uns, die durch Worten oder rationellen Gedanken geschlossen bleiben würden... Die Musik erlaubt uns einen Blick in unseren Inner zu werfen, wenn wir offen dafür sind, natürlich. Und wenn wir nicht nur Unterhaltung da suchen, sondern etwas mehr Ich erinnere mich jetzt an den Film "Amadeus" (das Leben von Mozart), hast du es gesehen? Wunderbar! Das sind meine Gedanken. Sag es mir, ob das genug ist. Ich könnte eventuell mehr darüber nachdenken.

(受理日 2017年1月11日)